

自意識と親和動機及び対人的疎外感との関連

金森 克允

(川畑 隆ゼミ)

問 題

私たちは、常に他者との関わりを持ちながら生きています。であるならば、他者と友好的な関係を築き、維持したいと考えることは不思議なことではない。わざわざ他者と険悪な関係を築きたいと考える人は稀だろう。なかでも、特に友好的な関係を維持していきたいと思うのは、学校における友人関係ではないだろうか。私たちが交友関係を築こうとする場合には、様々な思惑が交錯することだろう。単純に「相手と仲良くなりたい」、「深く知り合いたい」と思えるポジティブなものもあれば、「レポートを写させてくれるから」、「金持ちだから」といった利害なもの、「一人になりたくないから」といった後ろ向きでネガティブな動機もあるだろう。学校という場面では多くの場合、クラス内で仲良しの友達グループが形成される。一度完成されたグループに入り込むことは容易ではなく、グループに属せなかった人はクラスにおいて一人で過ごすことが多くなり、強い疎外感を感じるようになるだろう。「自分はひとりぼっちだ」「自分の居場所がない」などと、塞ぎ込みがちになることも珍しくない。しかし一方で、そういったグループに属せずとも、疎外感や孤独感に苛まれることなく学生生活を満喫できる人もいるだろう。それは、人によって感じる疎外感の程度に違いがあるということであるが、それには各々が持つどういった心理的要因が関係しているのだろうか。

(1) 親和動機

他者との関係を築くにあたって、人には様々な思惑があるのではないだろうか。相手に対する純粋な好意・興味などから友達になろうとする場合もあれば、寂しい奴だと思われたくないがゆえに、常に誰かと一緒にいることを求める場合もあるだ

ろう。親和動機とは、そういった他人と友好的な関係を成立させ、なおかつそれを維持していきたいという動機のことである。親和動機は、分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表し、他者からの拒否に対する恐れを要素を持つ「拒否不安」と、拒否に対する恐れや不安無しに人と一緒にいたいと考える「親和傾向」の2つの性質を持っている(杉浦, 2000)。前述した学校における仲良しグループの話に則るならば、「クラスで孤立したくないから」「仲間外れは嫌だから」といった理由のもとにグループに入り、その関係を維持している場合、それは拒否不安傾向に偏った親和動機によって形成された関係と言えるだろう。また、そういった不安や恐れとは関係なく、「この人と深く知り合いたい」「喜びや悲しみを共有したい」といった理由によって形成された関係は、親和傾向に偏った親和動機によるものと言える。

杉浦ら(1997)は、大学生において拒否不安傾向の強い親和動機は、集団において周りから理解されていないと感じる不適応感に繋がることを示している。また、社会的スキルの不足を指摘されることが多い非行少年において、親和傾向の強い親友に対しては高い社会的スキルを表出することが示されている(磯部他, 2002)。これらの研究結果から、さまざまな場面において、親和動機は拒否不安よりも親和傾向に偏るものが望ましいのではないかと思われる。

杉浦(2000)の研究によると、親和動機を構成する2つの側面である拒否不安と親和傾向は強い正の相関関係にある。小学生や中学生といった、発達の未熟な段階では、拒否不安と親和傾向とが未分化であり、親しい関係を維持したいと思うと、必然的に拒否不安も強くなってしまふ。それが高校生、大学生になると、拒否不安と親和傾向は次第に意味的に分化するようになり、拒否不安と親和傾向の相関関係は減少していく。このような2

つの親和動機の変化は、まさに自己の形成と適応的な対人関係の構築とに関わる発達の課題であると考えられる。

(2) 自意識

普通に生活していれば、自分自身について意識することは当然のことである。自身の感情や気分を意識を向けることができるからこそ、それに伴った行動を起こすことができる。また、自身が他者からどう見られているのか意識するからこそ、お洒落をするなど、他者に気を遣うことができる。このように自己を意識することを自意識という。自意識は、感情や気分など自己の内面的な側面に注意を向けやすい傾性の私的自意識と、服装や言動など他者から見られる外面的な側面に注意を向ける公的自意識からなるとされている。

菅原(1984)は、公的自意識、私的自意識の両尺度と対人不安意識尺度及び自己顕示性尺度との関連を調査した。その結果、対人不安意識との相関は、私的自意識との間では無相関であるが、公的自意識との間にはやや高めの相関($r=.31, p<.001$)が認められた。なかでも「対人関係で緊張する悩み」、「大勢の人に圧倒される悩み」、「変な人に思われる悩み」との間に高い相関がみられた。また、自己顕示性との相関は、対人不安意識同様、私的自意識との間では低いが、公的自意識との間では高め($r=.40, p<.001$)である傾向が認められた。これらの概念上相反する対人不安意識と自己顕示性がともに公的自意識と正の相関を持つという結果は、他者の目に映る自分を強く意識しやすい人は、積極的な自己呈示行動、もしくは逆に防衛的、逃避的行動をとりやすいことを示唆している。

自意識の研究としては他に、自意識の内容的特徴についての発達の、臨床的分析や自意識から派生する感情(羞恥心、罪責感、困惑など)の研究、比較心理学的研究など様々な研究が行われている。

(3) 対人的疎外感

疎外感といえば、自分がのけ者にされていると感じる、いやな気分のことである。実際に周りから疎外されているかどうかではなく、本人が疎外感を感じているかどうか重要であり、類語とし

て孤独感などがある。疎外感や孤独感と聞けば、例えば学校場面においては、友人がおらず、ひとりぼっちでいる状態を想起しがちだが、多くの友人に囲まれていても、精神的に繋がっていない、自分の気持ちをわかってもらえていない、といった疎外感を感じていることは珍しくない。

対人的疎外感とは、他者の何でもない行動やしぐさを自分に向けられたものと感じ、自分に関連付けて物事を被害的に判断する傾向である「自己関係づけ」と正の相関関係にあることが明らかにされており、対人的疎外感を構成する要因として、自己関係づけが存在すると考えられる(宮野他, 2009)。

「疎外感が問題行動を惹起させる素因となり、そうした不適応行動が、疎外感をますます増長させる」と想定することも可能な研究結果も出ている。疎外感と人格の発達ないし適応との関係を説明することを目的とした研究では、問題児群は、一般児群に比べ、疎外感得点が有意に高い得点を示している。これは、問題児と言われるものが、強い疎外感を体験しており、表面的には、自己の力を誇示するかのように乱暴をはたらき、逸脱した行動をとりやすい生徒たちも、内面では、対人感情におけるやりきれない淋しさや空しさ、自己嫌悪などに苦しんでいることを示しており、暖かい援助の手を強く求めているように思われる(宮下他, 1981)。

(4) 親和動機と対人的疎外感の関係

拒否不安と親和傾向という2つの親和動機と対人的疎外感との関係、及びそれらの関係の発達差や男女差を調べることを目的とした杉浦(2000)の研究では、拒否不安と親和傾向は高い正の相関を示すにもかかわらず、拒否不安は対人的疎外感と正の関係を、親和傾向は負の関係を示すことが明らかとなり、親和動機は対人的疎外感に対して全く逆の影響を持つ2つの要素があることがわかった。しかし例外として、中学生男子においてのみ、拒否不安と対人的疎外感に負の関係が示され、まったく逆の結果となった。これは、中学生男子において一緒に行動するグループを持っていない者は非常に少なく、中学校のように集団の凝集性が高いところでは、仲間外れにされるよりは、た

とえ自分が出せなくても集団の中でいた方が対人的疎外感を感じずにすみ、自分を守ることができるからではないか、拒否不安は結果的に集団でうまくやっていくための社会的スキルとして働いているのではないかと、杉浦(2000)は述べている。落合・佐藤(1996)が述べているように、中学生にとっての友達と一緒にいるため、一緒に遊ぶための存在であるため、中学生男子にとっては、拒否不安によって自分らしさが出せずとも、友達と一緒にいられれば対人的疎外感を感じずにすむということなのだろう。

前述したように、親和動機において、発達とともに拒否不安と親和傾向の相関関係が減少していく。拒否不安と親和傾向の相関が強く、未分化である段階では、親和動機を強く持つことにより、同時に強い拒否不安から自分らしさを出せない疎外感に苦しまなくてはならなくなってしまう。大学生にもなると、発達の自分らしさを出したい、自分らしさを理解されたいと考える時期であるために、自分を押し殺すことになる拒否不安は一貫して対人的疎外感を高めることになる。しかし、拒否不安と親和傾向が次第に意味的に分化していくことによって、自分を出しつつ親しい関係を維持することが可能になっていく。このように、2つの親和動機の変化は、対人関係場面における非常に重要な発達課題であるといえるだろう。

目 的

菅原(1986)は、賞賛されたい欲求、拒否されたくない欲求という2つの欲求が、公的自意識と正の相関関係にあることを明らかにし、その結果から公的自意識の強い人々は他者から賞賛されることや拒否されないことを対人場面における重要な目標としていたと考えた。この「拒否されたくない欲求」は、親和動機における「拒否不安」と非常に近いものであるため、親和動機の傾向にも自意識が影響しているのではないかと考えられる。また、対人的疎外感について、公的自意識の高い人は、他者から見られる自分を強く意識するからこそ、他者との距離感などに敏感になってしまい、対人的疎外感を感じやすくなっているのではないかと考えられる。

本研究では、菅原(1984)によって作成された「私的自意識」「公的自意識」の2下位尺度から構成される「自意識尺度」と、杉浦(2000)によって作成された「親和傾向」「拒否不安」の2下位尺度から構成される「親和動機尺度」及び、杉浦(2000)によって作成された「対人的疎外感尺度」を用いて、自意識と親和動機、自意識と対人的疎外感、親和動機と対人的疎外感との関連について調査することを目的とした。

仮 説

仮説1 公的自意識が高い人ほど、親和動機における拒否不安傾向が高い。

前述したように、公的自意識と拒否されたくない欲求は正の相関関係にあることが明らかにされている。公的自意識の高い人にとって「拒否されないこと」が対人場面における重要な目標であるならば、公的自意識が高い人ほど、他者からの拒否を恐れる拒否不安による親和動機の高まりがみられると予想される。

仮説2 私的自意識が高い人ほど、親和動機における親和傾向が高い。

私的自意識は、感情や気分など自己の内面的な側面に対する注意の向きやすさを表す。つまりは自身を客観的に見つめ、自身の考えを冷静に分析し把握できるということである。ならば、他者からの拒否に対する不安や恐怖を抜きにした「この人と仲良くなりたい」といった自身の正直な気持ちを読み取り、それを行動に移すことが可能となり、親和傾向による親和動機を高めることができるのではないかと考えられる。

仮説3 公的自意識が高い人ほど、対人的疎外感を感じやすくなる。

公的自意識が高いということは、自身に対する他者の態度に敏感だということである。公的自意識が高ければ、低い場合と比べ、他者の何気ない態度やしぐさから疎外感を感じ取ることが多いのではないかと考えられる。

仮説4 私的自意識の高低は、対人的疎外感の強

さに影響しない。

対人的疎外感は、「冷たい目でみられている気がする」「理解してくれる人がいない」など、他者の態度を感じ取ることによって生じるものである。そのため、自身の内面的な側面へ注意を向ける私的自意識の高低によって、対人的疎外感が影響を受けることはないと予想される。

仮説 5 拒否不安が高い人ほど、対人的疎外感を感じやすい。

杉浦 (2000) において、大学生における拒否不安と対人的疎外感との間には正の相関がみられており、2つの親和動機を独立変数、対人的疎外感を従属変数とした重回帰分析において、拒否不安が対人的疎外感に正の影響を与えることが示されている。拒否不安に基づいて自分を殺すことは、青年期におこる自分らしさを出したい欲求と矛盾することになるために対人的疎外感を高めてしまうと考えられるため、本研究でも同様の結果が得られると予想される。

仮説 6 親和傾向が高い人ほど、対人的疎外感を感じにくい。

杉浦 (2000) において、大学生における拒否不安と対人的疎外感との間には相関がみられなかったが、2つの親和動機を独立変数、対人的疎外感を従属変数とした重回帰分析において、親和傾向が対人的疎外感に負の影響を与えることが示されている。親和傾向を強く持つことで、友人と深く付き合うことができ、それによって、仲間外れのような孤独感からなる対人的疎外感を感じずにすむのだと考えられるため、本研究でも同様の結果が得られると予想される。

方 法

調査時期

2013年12月9日、12月10日、12月11日、12月12日、12月16日の5日間で行った。

実施方法

京都学園大学の講義受講者に質問紙を配布し、その講義内に回収した。

調査対象

京都学園大学に在籍する大学生に123名に対し質問紙調査を行い、回答に不備のあるものを除いた115名(男性61名、女性54名、平均年齢20.29歳)を分析の対象とした。

質問紙の構成

(1) フェイスシート

回答者の基本的属性要因(学年・年齢・性別)についての記入欄を設けた。

(2) 自意識尺度

菅原(1984)によって作成された自意識尺度を用いた。2下位尺度(公的自意識、私的自意識)はそれぞれ11項目、10項目の全21項目で構成されている。「1. 全くあてはまらない」「2. あてはまらない」「3. ややあてはまらない」「4. どちらともいえない」「5. ややあてはまる」「6. あてはまる」「7. 非常にあてはまる」の7件法で回答し、回答の数値を得点とみなし(逆転項目は「7. 全くあてはまらない」～「1. 非常にあてはまる」)、各尺度について項目の合計点を算出する。教示は以下の通りである。「以下の項目は、あなたにどの程度あてはまるでしょうか。「7. 非常にあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」のうち最も近いものひとつに○をつけてください。」

(3) 親和動機尺度

杉浦(2000)によって作成された親和動機尺度を用いた。2下位尺度(拒否不安、親和傾向)は各9項目の全18項目で構成されている。それぞれの項目について5段階で回答する。それぞれの回答について「あてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点として得点化する。下位尺度ごとの合計を算出し、拒否不安、親和傾向の得点とする。得点が高いほど、拒否不安、親和傾向が高いことを示す。教示は以下の通りである。「以下の質問について、自分がどれくらいあてはまるかを考えて教えてください。選択肢は「1. あてはまらない／2. あまりあてはまらない／3. どちらともいえない／4. ややあてはまる／5. あてはまる」である。」

(4) 対人的疎外感尺度

杉浦(2000)によって作成された対人的疎外感尺度を用いた。質問は20項目で構成されている。それぞれの回答について「あてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点で得点化する。項目全体(21項目)の合計を算出し対人的疎外感得点とする。得点が高いほど対人的疎外感が高いことを示す。教示は以下の通りである。「以下の質問について、自分にどれくらいあてはまるかを考えて教えてください。選択肢は「1. あてはまらない／2. あまりあてはまらない／3. どちらともいえない／4. ややあてはまる／5. あてはまる」である。」

結 果

自意識尺度における2下位尺度と親和動機尺度における2下位尺度、および対人的疎外感尺度の平均値と標準偏差を表1に示した。「公的自意識」の平均値が4.99、標準偏差は1.10であった。「私的自意識」の平均値が4.92、標準偏差は0.80であった。「拒否不安」の平均値が3.21、標準偏差は0.89であった。「親和傾向」の平均値が3.53、標準偏差は0.90であった。対人的疎外感尺度の平均値が2.64、標準偏差は0.75であった。

	平均値	標準偏差
公的自意識	4.99	1.10
私的自意識	4.92	0.80
拒否不安	3.21	0.89
親和傾向	3.53	0.90
対人的疎外感	2.64	0.75

表1 記述統計量

	公的自意識	私的自意識	拒否不安	親和傾向	対人的疎外感
公的自意識	—				
私的自意識	.367***	—			
拒否不安	.621***	-.009	—		
親和傾向	.358***	.219*	.512***	—	
対人的疎外感	.158	.017	.093	-.422***	—

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表2 自意識と親和動機および対人的疎外感の相関分析

(1) 信頼性分析

自意識尺度と親和動機尺度、対人的疎外感尺度の各項目に関して、Cronbachの α 係数を用いて信頼性分析を行った。

自意識尺度は2下位尺度それぞれ11項目、10項目について信頼性分析を行った。「公的自意識」の α 係数は.904であった。「私的自意識」の α 係数は.758であった。2下位尺度それぞれの内的一貫性は十分であると判断した。

親和動機尺度は2下位尺度各9項目について信頼性分析を行った。「拒否不安」の α 係数は.884であった。「親和傾向」の α 係数は.900であった。2下位尺度それぞれの内的一貫性は十分であると判断した。

対人的疎外感尺度20項目について信頼性分析を行った。 α 係数は.927であり、内的一貫性は十分であると判断した。

(2) 相関係数

自意識と親和動機および対人的疎外感の関係を見るために、相関分析を行い、結果を表2に示した。

「公的自意識」と「私的自意識」の間には、有意な弱い正の相関が認められた($r = .367, p < .001$)。「公的自意識」と「拒否不安」の間には、有意な中程度の正の相関が認められた($r = .621, p < .001$)。「公的自意識」と「親和傾向」の間には、有意な弱い正の相関が認められた($r = .358, p < .001$)。「公的自意識」と対人的疎外感の間には、有意な相関は認められなかった($r = .158, ns$)。「私的自意識」と「拒否不安」の間には、有意な相関は認められなかった($r = -.009, ns$)。「私的自意識」と「親和傾向」の間には、有意な弱い正の相関が認められた($r = .219, p < .05$)。「私的自意識」と

自己意識と親和動機及び対人的疎外感との関連

対人的疎外感の間には、有意な相関は認められなかった($r=.017, ns$)。「拒否不安」と「親和傾向」の間には、有意な中程度の正の相関が認められた($r=.512, p<.001$)。「拒否不安」と対人的疎外感の間には、有意な相関は認められなかった($r=.093, ns$)。「親和傾向」と対人的疎外感の間には、有意な中程度の負の相関が認められた($r=-.422, p<.001$)。

(3) 重回帰分析

自己意識が親和動機と対人的疎外感にどのような影響を与えているのかを明らかにするため、親和動機を構成する2下位尺度(拒否不安、親和傾向)と対人的疎外感をそれぞれ従属変数とし、自己意識を構成する2下位尺度である「公的自己意識」、「私的自己意識」を独立変数とした重回帰分析を行った。また、親和動機が対人的疎外感にどのような影響を与えているのかを明らかにするため、対人的疎外感を従属変数とし、親和動機を構成する2下位尺度である「拒否不安」、「親和傾向」を独立変数とした重回帰分析を行った。

まず、「拒否不安」について、「公的自己意識」が正の影響($\beta =.721, p<.001$)を、「私的自己意識」が負の影響($\beta =-.274, p<.001$)を及ぼしていた。

「親和傾向」について、「公的自己意識」が正の影響($\beta =.321, p<.001$)を及ぼしていた。「私的自己意識」は影響を及ぼしていなかった($\beta =.102, ns$)。

対人的疎外感について、「公的自己意識」は影

響を及ぼしていなかった($\beta =.175, ns$)。「私的自己意識」もまた影響を及ぼしていなかった($\beta =-.048, ns$)。「拒否不安」が正の影響($\beta =.419, p<.001$)を、「親和傾向」が負の影響($\beta =-.636, p<.001$)を及ぼしていた。

考 察

本研究の目的は、大学生における自己意識と親和動機及び対人的疎外感の関連について調査することである。

(1) 自己意識尺度と拒否不安との関連についての検討

公的自己意識が拒否不安に対し強い正の影響($\beta =.721, p<.001$)を及ぼしており、相関分析では関係がみられなかった私的自己意識は、重回帰分析では弱い負の影響($\beta =-.274, p<.001$)が認められた。これにより、仮説1は支持された。

仮説1が支持されたのは、菅原(1986)が述べたように、公的自己意識の強い人は他者から賞賛されることや拒否されないことを対人場面における重要な目標としているためだと思われる。他者から見た自分に対する強い意識が、他者から拒否されまいとする防衛的な親和動機を持たせるのではないだろうか。また、仮説では触れなかったが、私的自己意識が拒否不安に対し負の影響を及ぼすことが示された。私的自己意識は、感情や気分など自己の内面的な側面に注意を向けるものである。菅原

	拒否不安	親和傾向	対人的疎外感
公的自己意識	.721***	.321***	.175
私的自己意識	-.274***	.102	-.048
R ²	.450***	.137***	.027

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表3 自己意識についての重回帰分析結果

	対人的疎外感
拒否不安	.419**
親和傾向	-.636***
R ²	.308***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表4 親和動機についての重回帰分析結果

(1984)によると、私的自意識の高い人は、その時々で自分の意見や態度を自覚しているため、態度と行動との間の一貫性が高いとされている。そういった、言わばブレのない態度と行動により交友関係が円滑化されることにより、「仲間外れにされるかもしれない」といった不安が減少し、そのような不安からなる親和動機を和らげる効果を発揮しているのではないだろうか。

(2) 自意識尺度と親和傾向との関連についての検討

公的自意識が親和傾向に対し ($\beta = .321, p < .001$) という弱い正の影響を及ぼしており、相関分析では弱い正の相関がみられていた私的自意識は、親和傾向への影響が認められなかった。これにより、仮説2は支持されなかった。

仮説1の検証で、私的自意識は交友関係を円滑に進めるための重要なスキルとして機能すると考えた。しかし、交友関係の円滑化による拒否不安の緩和はみられるものの、「この人と仲良くなりたいたい、仲良くしていきたい」といった、親和傾向に偏った交友関係の構築・継続への動機面には影響を及ぼさないのだと考えられる。また、仮説では触れなかったが、公的自意識が親和傾向に対し正の影響を及ぼすことが示された。公的自意識の高い人は、自身の外的側面に注目し、他者の視点から自身を捉える傾向が高く、自分と他者の相違点、あるいは類似点を意識しやすい。それにより他者への関心が触発され、内面的な交友関係を望む親和傾向が高まるのではないだろうか。

(3) 自意識尺度と対人的疎外感尺度との関連についての検討

公的自意識、私的自意識ともに対人的疎外感への影響は認められなかったことから、仮説3は支持されなかった、また仮説4は支持された。

公的自意識が高い人は、他者の態度に敏感であるために、疎外感を感じ取ることが多いのではないかと考えたが、公的自意識と対人的疎外感の間には関係がみられず、また私的自意識に対しても対人的疎外感との関係がみられなかったため、自意識の強さは対人的疎外感に影響しないものと判断できる。仮説3が支持されなかったのは、公的自意識の高い人の、他者からの評価の態度に敏感

である特徴が、対人的疎外感の増加と減少の両面に作用した結果ではないだろうか。公的自意識の高い人は、他者の目を意識して自己表出の仕方をコントロールする傾向が強いことが報告されている(菅原1984)。他者からの視線に敏感であるがゆえに、他者の態度から疎外感を感じ取ったとしても、その都度適切な対応を選択し、適応的な行動をとる力を持っているため、状況の改善や、あるいは「対応した」という意識から対人的疎外感は減少し、結果的に増加と減少が打ち消し合うこととなるため、対人的疎外感を感じる程度は、結果として公的自意識の強さに影響を受けないのではないだろうか。仮説4が支持されたのは、私的自意識は自身の内面への注意付けであり、対人的疎外感是他者の態度を感じ取ることによって生じるものであるため、直接的に他者の存在によって私的自意識が影響を受けることはなく、同様に私的自意識から対人的疎外感に対しても、直接的な影響を及ぼすことはないためだろう。

(4) 親和動機尺度と対人的疎外感尺度との関連についての検討

拒否不安が対人的疎外感に対し中程度の正の影響 ($\beta = .419, p < .001$) を、親和傾向が対人的疎外感に対し中程度の負の影響 ($\beta = -.636, p < .001$) が認められた。また、拒否不安と親和傾向の間に中程度の正の相関 ($r = .512, p < .001$) がみられており、杉浦(2000)と類似した結果が得られた。これにより、仮説5、仮説6ともに支持された。

仮説5が支持されたのは、杉浦(2000)が述べたように、拒否不安に基づいて自分を殺すことは、青年期における自分らしさを出したい欲求と矛盾することになるために対人的疎外感を高めたためだろう。拒絶への恐れからの表面的な交友関係はやはり望ましいものではなく、対人的疎外感の高まりから孤立を生み、様々な問題に繋がってしまうことは想像に難くない。

仮説6が支持されたのは、杉浦(2000)が述べたように、親和傾向を強く持つことで、友人と深く付き合うことができ、それによって、仲間外れのような孤独感からなる対人的疎外感を感じずにすむためだろう。人と深く知り合い、自分らしさを出した上で良好な交友関係を築くことができる親

和傾向による親和動機は、拒否不安からなるものよりも望ましいことは明らかであると考ええる。

以上の結果から、自意識は2つの親和動機に対して強い影響を及ぼすことが明らかとなった。また、2つの親和動機は、それぞれ対人的疎外感に対して正反対の影響を持つこと再確認された。様々な問題へと繋がるのが懸念される対人的疎外感を緩和させるためには、拒否不安による表面的な交友関係ではなく、親和傾向からなる内面的な交友関係を築いていくことが重要な課題となる。自意識から対人的疎外感への直接的な影響はみられなかったが、自意識が親和動機における拒否不安を軽減させ、親和傾向を増加させる影響があることから、自己への意識は決して軽視できるものではないといえる。

ちなみに、杉浦(2000)の研究における拒否不安と親和傾向の相関は、中学($r=.58, p<.01$)、高校($r=.47, p<.01$)、大学($r=.41, p<.01$)であり、本研究で得られた拒否不安と親和傾向の相関($r=.512, p<.001$)は、発達段階における親和動機の未分化を窺わせる。

今後の課題

本研究では、自意識と親和動機及び対人的疎外感が、互いにどのような影響を及ぼしているのかについての検討を行ったが、自意識のみならず、他者への意識・関心が親和動機や対人的疎外感に影響を与える可能性は大いに考えられるだろう。近年、青年にとって友人関係が有意義なものになっているかどうか、青年の成長や発達に友人関係がうまく機能しているかについて疑問視される声があがっている(廣實, 2003)。特に現在では、情報機器の発達や生活環境の変化などにより、友人への関心や親密感が薄れ、より表面的な交友関係が蔓延している可能性がある。今後の研究では、その辺りも加味する必要があるかもしれない。友人関係の希薄化が囁かれる現代において、若者の交友関係に注目した研究は非常に重要な意味を持つだろう。そういった研究の積み重ねが、様々な心理的問題の解決への糸口となっていくのではないだろうか。

謝 辞

本論文の作成にあたり、ご指導頂きました京都学園大学人間文化学部心理学科川畑隆教授、行廣隆次准教授、赤間健一講師、ならびに、調査にご協力いただいた先生方、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 磯部美良・堀江健太郎・前田健一 2002 非行少年と一般少年の社会的スキルと親和動機の関係 日本教育心理学会総会発表論文集 44, 132
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究 44(1), 55-65
- 菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究 55(3), 184-188
- 杉浦健・北浦勝哉 1997 親和動機の2要素と集団での不適応感との関係:発達の变化と男女間の比較 日本教育心理学会総会発表論文集 39, 292
- 杉浦健 2000 2つの親和動機と対人的疎外感との関係—その発達の变化— 教育心理学研究 48, 352-360
- 廣實優子 2003 現代青年の交友関係に関連する心理的要因の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要・第三部, 教育人間科学関連領域 51, 257-264
- 宮下一博・小林利宣 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究 29(4), 297-305
- 宮野麻里絵・伊藤宗親 2009 青年期における対人的疎外感と自己関係づけとの関連:下人帰属に焦点をあてて 岐阜大学カリキュラム開発研究 26(1), 1-5

大学生の意識調査

この調査は、大学生の対人関係および自分自身に対する意識について調べようとするものです。各質問について、ありのままにお答えください。またその際、回答漏れのないようにお願いします。なお、結果はすべて統計的に処理され、個人がどのような回答を行ったかを問題としたり、公表することはありません。質問紙は責任を持って保管し、調査終了次第、適切に処分いたします。回答の途中で体調が悪くなったり、精神的な苦痛を感じられた場合は、回答をやめていただいて構いません。

この質問紙によって個人が特定されることはありませんので、調査にご協力いただければ幸いです。

学年()回生

年齢()歳 性別(男 ・ 女)

京都学園大学 人間文化学部
心理学科 川畑ゼミ 金森克允

自意識と親和動機及び対人的疎外感との関連

以下の項目は、あなたにどの程度あてはまるでしょうか。「7. 非常にあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」のうち最も近いものひとつに○をつけてください。

	全くあては まらない	い あてはまらな い	ややあてはま らない	どちらともい えない	ややあてはま る	あてはまる	非常にあてはま る
1. 自分が他人にどう思われているのか気になる	1	2	3	4	5	6	7
2. 気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取る方だ	1	2	3	4	5	6	7
3. 人に会う時、どんなふうにするまえば良いのか気になる	1	2	3	4	5	6	7
4. 人にみられていると、つかっこうをつけてしまう	1	2	3	4	5	6	7
5. 自分の容姿を気にするほうだ	1	2	3	4	5	6	7
<hr/>							
6. 人前で何かするとき、自分のしぐさや姿が気になる	1	2	3	4	5	6	7
7. 他人からの評価を考えながら行動する	1	2	3	4	5	6	7
8. 初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう	1	2	3	4	5	6	7
9. 自分がどんな人間か自覚しようと努めている	1	2	3	4	5	6	7
10. その時々のお持ちの動きを自分自身でつかんでいたい	1	2	3	4	5	6	7
<hr/>							
11. 自分についてのうわさに興味がある	1	2	3	4	5	6	7
12. 他人を見るように自分をながめてみることがある	1	2	3	4	5	6	7

- | | | | | | | | |
|------------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|
| 13. ふと、一步離れた所から自分をながめて
みることもある | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 14. 自分自身の内面のことには、あまり関心
がない | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 15. 自分が本当は何をしたいのか考えながら
行動する | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| <hr/> | | | | | | | |
| 16. 人の目に映る自分の姿に心を配る | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 17. 自分を反省して見ることが多い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 18. 自分の発言を他人がどう受け取ったか気
になる | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 19. しばしば、自分の心を理解しようとする | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 20. つねに、自分自身を見つめる目を忘れな
いようにしている | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| <hr/> | | | | | | | |
| 21. 世間体など気にならない | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |

自意識と親和動機及び対人的疎外感との関連

以下の質問について、自分がどれくらいあてはまるかを考えて教えてください。

選択肢は「1. あてはまらない／2. あまりあてはまらない／3. どちらともいえない／4. ややあてはまる／5. あてはまる」である。

	い あてはまらな い	あ ま り あ て は ま ら な い	ど ち ら と も い え な い	ら や あ て は ま る	あ て は ま る
1. 仲間から浮いているように見られたくない	1	2	3	4	5
2. 友達と非常に親密になりたい	1	2	3	4	5
3. できるだけ敵は作りたくない	1	2	3	4	5
4. 知り合いが増えるのが楽しい	1	2	3	4	5
5. 誰からも嫌われたくない	1	2	3	4	5
<hr/>					
6. 人と深く知り合いたい	1	2	3	4	5
7. 仲間外れにされたくない	1	2	3	4	5
8. 一人であることで変わった人と思われたくない	1	2	3	4	5
9. 友人とは本音で話せる関係でいたい	1	2	3	4	5
10. 人とつきあうのが好きだ	1	2	3	4	5
<hr/>					
11. 一人ぼっちでいたくない	1	2	3	4	5
12. 友達には自分の考えていることを伝えたい	1	2	3	4	5
13. みんなと違うことはしたくない	1	2	3	4	5
14. 友達と喜びや悲しみを共有したい	1	2	3	4	5
15. 友達と対立しないように注意している	1	2	3	4	5
<hr/>					
16. できるだけ多くの友達を作りたい	1	2	3	4	5
17. どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	1	2	3	4	5
18. 一人であるよりも人と一緒にいたい	1	2	3	4	5

以下の質問について、自分にどれくらいあてはまるかを考えて教えてください。

選択肢は「1. あてはまらない／2. あまりあてはまらない／3. どちらともいえない／4. ややあてはまる／5. あてはまる」である。

	い あてはまらな い	あ ま り あ て は ま ら な い	ど ち ら と も い え な い	や や あ て は ま る	あ て は ま る
1. 自分の居場所がないように感じる	1	2	3	4	5
2. 何か言っても無視されることがおおいよ うだ	1	2	3	4	5
3. 何かに縛られ自由に動けないようだ	1	2	3	4	5
4. 自分はやさしい人々に囲まれて決して一 人ではないと思う	1	2	3	4	5
5. 何かに追いつめられているような感じを よく持つ	1	2	3	4	5
<hr/>					
6. 私には本当に理解し合える人はほとんど いないように思う	1	2	3	4	5
7. うちとけて話ができる人は私にはあまり いないように思う	1	2	3	4	5
8. 本当の自分を理解されているように感じ る	1	2	3	4	5
9. みんなが冷たい目で私を見ているようだ	1	2	3	4	5
10. 何かにせきたてられて生きている感じが する	1	2	3	4	5
<hr/>					
11. 私は一人ぼっちであると感じることがよ くある	1	2	3	4	5
12. あるがままの自分を出せない	1	2	3	4	5

自意識と親和動機及び対人的疎外感との関連

	い あてはまら ない	あ ま り あ て は ま ら な い	え な い	ど ち ら と も い え な い	あ て は ま る	あ て は ま る
13. 私の毎日は実にはのびのびしているように 思う	1	2	3	4	5	5
14. 悩み等を話せる友人がいない	1	2	3	4	5	5
15. 毎日が緊張の連続で息苦しさを感ずるこ ともある	1	2	3	4	5	5
<hr/>						
16. みんないつも温かい心で私を迎え入れて くれるように思う	1	2	3	4	5	5
17. 私は他人からあまり信頼されていないよ うだ	1	2	3	4	5	5
18. 他人に気兼ねして自分のやりたいこと ができない	1	2	3	4	5	5
19. 自分がしたくないことをさせられている とよく感じる	1	2	3	4	5	5
20. わけもなく疲労を感じるものがしばしば ある	1	2	3	4	5	5
<hr/>						
21. 私を認めてくれる人はいないようだ	1	2	3	4	5	5

質問は以上です。

ご協力ありがとうございました。